

## 「山岡くん、見そこなったわ」

山岡 雅博(本学教職研究科教授 臨床教育学)

小学校3年生の運動会の練習のとき、担任の先生からかけられた言葉が忘れられない。

グラウンドでは他の学年の子どもたちが練習をしていた。3年生は校庭の端で、並んでしゃがんで待っていた。僕はそばのブランコに座って、他の学年の練習をぼんやりながめていた。唐突に言葉が飛んできた。青い空とブランコが目には焼き付き、「山岡くん、見そこなったわ」という言葉が脳裏に焼き付いた。何も言えなかった。その記憶はそこまですべて終わっている。

当時の担任の先生ことはよく覚えている。おそらく50歳代だったと思う。優しくふくよかで、祖母を知らない僕にとって、おばあちゃんのように感じていた存在だった。遊び仲間、クラスにも地域にもいっぱいいて、毎日夕暮れ時まで遊んでいた。だから毎日が楽しく、いやなことはどこにもなかった。

あれから50年近くたって、大学の教職課程の授業準備をしているときに、不意に思い出した。50年も前のことを鮮明に覚えている。僕は傷ついていたのかも知れない。そのころの僕は学校でがんばり過ぎて、週末にはよく熱を出していた。僕にとって、先生の言うことは絶対だった。忘れ物も宿題忘れもしなかった。勉強もがんばっていた。受験を考えていたわけでもなく、誰かと競争していたわけでもない。小学校の高学年から中学校、そして高校1年まで、僕は先生の言うことをよく聞く「良い子」だった。きっと、先生をがっかりさせたくなかったのではないかと今は思う。先生の表情をうかがい、まわりの状況を読みながら過ごしていた。大好きな先生をがっかりさせた記憶は、ふたをされたまま、癒やされることもなく、僕を動かしていた。

高校1年の時、父の転勤で、僕は父の会社の育英寮に入るようになった。基本的には大学生のための育英寮で、僕は唯一の高校生だった。何年か留年している人の部屋には、畳敷きのベッドの上にこたつが1年中置かれ、こたつの上には誰の飲みかけかわからな

い飲み物や食べ物、灰皿などが雑然と置かれていた。不思議な居心地の良さで、いつでも誰かがきいていた。彼らとの出会いで、僕のなかの「あたりまえ」が壊れはじめた。麻雀を打ち、ギターを弾いて歌い、時間を忘れて語り合った。やがて、きちんとしていた僕の部屋も雑然としていった。

「あたりまえ」がゆらぐと、さまざまな疑問がわいてきた。「何で部屋はきれいにしておくの?」「何のための勉強、何で大学に行く?」そして、「何のために生きる?」。教師や親のまなざしの中には、正解はないことによく気づきだしたころだった。

なぜ、小学3年生の僕は何も言えなかったのだろうか。何があったのだろうか。僕はただブランコに座っていただけで、ブランコを振って遊んでいたわけではなかった。だから、悪いことをしている気持ちは一切なかった。急に叱られて、びっくりして何も言えなかったように思う。遊ぶためではなかったと考えるうちに、しゃがめなかったことを思い出した。小学4年と6年のとき、左右の膝の半月板の手術をして、それぞれ2ヶ月ほど入院していた。当時は膝を深く曲げることができず、和式トイレが苦痛だった。僕の中に閉じ込められていたものが現れてきた。

きっと、先生は覚えていないだろう。運動会の練習の順番待ちのために、しゃがんで待つように指示をした。ほとんどの子どもは、きちんと並んでしゃがんでいる。その列から外れて、一人でブランコに乗っているのがあの山岡くんだった。期待を裏切られて思わず「山岡くん、見そこなったわ」と言ってしまったのだろう。大好きな先生に叱られたショックと、何が起こったかわからないモヤモヤが混ざり合い、澱となって心に沈んでいった。それでも、先生を恨む気にはなれなかった。

あのとき、「山岡くん、どうしたの?」と聞かれていたら、膝の痛みのことを言えていたかも知れない。